

満洲移民事業の理念と現実〈前篇〉

田川 真理子

キーワード 満洲移民、建前と現実、国家、精神主義

凡 例

- ・引用に際して、仮名遣いは原文のまま、旧字体は新字体に改めた。
- ・引用文献が漢文の場合、書き下し文に改めた。
- ・原文史料中、判読不能な箇所は*に変えて引用した。

1. はじめに

『拓け満蒙 日本の使命』と題された1本のフィルムがある。¹これは、戦前、満洲教育映画協会により製作されたもので、日本内地に向けて満洲事情を周知せしめんがために使用されたものと思われる。そのフィルムの内容や如何？それは、“輝かき満蒙生活”とも称すべきものである。一面に広がるトマト畑、馬鈴薯畑、どこまでも続く麻、ソバ、アスパラガス、タバコ、そして小麦畑。駄目押しの如く、「これら農作物は少しの肥料も使ってはいないのであります」とのナレーション。さらに、個人経営の自作農になれば、1戸あたり少なくとも15町以上の土地が必要となるが、その内地とは桁外れの耕作も、「今はトラクターがすさまじき音を響かせて作動しております」と機械化農法が繰り広げられる様が映し出される。大量の雑草もリッパーなる刈り取り機が快速に処理していく。また、稲作についてもご覧の通り、と「黄金の穂の波打つところ」とのナレーションとともに映し出される。

酷寒の気候条件は、もはや日本においても周知の事実となっていたであろうが、ここでは、その気候条件ゆえの半農半牧生活が、まことに希望に満ちたものとして描き出される。綿羊の群れ、丸々と肥えた牛、蹄鉄工場さえ完備されるほどの、駆け巡る馬馬の壮大な風景。こういった“希望に満ちた大地”の姿とともに、もうひとつ強調されるのは“皇国日本の地”としてのイメージであろう。フィルムの冒頭には、新京に建てられた忠霊塔が厳かに映し出される。午前6時に打ち鳴らされる鐘を合図に集合し、東天に向けて皇居遙拝した後、君が代斉唱、国旗掲揚、“天皇陛下彌栄”との三唱ではじまる移民地の朝が映し

出される。そして、「この意気でこそ、満蒙開拓の使命は果たされるものであります」とのナレーションが流れる。また、移民地に建てられた日本内地さながらの神社も映し出される。

さらに、もう1点付け加えるならば、流線型超特急として登場した新機種の其の名はずばり“あじあ号”である。これを、満洲国の建国理念の民族協和を狙った宣撫作戦と感じるのは私の読みすぎであろうか。しかし、これ以外にも“日満親善”なる文字をプリントしたシャツを来た移民の姿がさりげなく映し出される。

日本内地においては、その地理的条件、或いは旧来の土地制度により、小作に甘んじてきた人々、猫の額ほどの田畑を耕すことで潔しとせねばならなかった人々の心を捉えるフィルムであったことは間違いないように思われる。何処までも続く雄大な大陸の風景は、日本に閉塞感を覚え、辟易としていた人々にとっては、まさに夢のパラダイスの如く映ったであろう。その意味で、このフィルムは成功したといえる。しかし、果たして満蒙の地がこのフィルムの如く理想郷でありえたのか。その答えは、今現在、中国残留孤児、或いは残留婦人と称される人々が多く存在し、日本に肉親探しに訪れる現実が如実に語るところであろう。

満洲移民については、移民史研究の領域からは、同列に扱うことのできないものとして範疇外として扱われてきた。そして、満洲移民を扱った文献の多くは、終戦直前の混乱期の中で繰り広げられた悲劇にのみ焦点が当てられ、満洲移民の全体像が浮かび上がってこなかった嫌いがある。そこで、本稿では、全40巻からなる1次資料、『満洲移民関係資料集成』を基軸に、戦前から現在に至る傷痕の元凶、すなわち、「満蒙」の地に寄せられた日本国中枢部の思想が如何なるものであったかを考察していくことにより、満洲移民の実態を究明していく。

2. 満洲移民論の建前と現実

日本が満洲と直接の関わりをもったのは日清戦争（1894—1895）にはじまる。その後、帝政ロシアが満洲を制圧し更に朝鮮の支配をめぐる日本と対峙すると、日本は武力で争うことになった。日露戦争（1904—1905）に辛勝した日本は、関東州と呼ぶ遼東半島南部の租借地と、東清鉄道南部支線の鉄道（のちの満鉄）をロシアから譲渡させ、長春以南の地に君臨することになった。

満洲郡総参謀長であった児玉源太郎は1906（明治39）年7月に以下のように

述べる。「我若し満洲に於て、五十万の移民と数百万の畜産とを有せんか、戦機若し我に利ならば、進みて敵国を侵略するの準備とすべく、亦若し我に不利ならば敢然不動、和を持して以て機会を俟つに足るべし。是れ満韓経営大局の主張なり」。ここでは、明らかに移民すなわち戦闘要員なりと位置付けられている。

満洲経営の主導力は国策機関でもある満鉄（南満洲鉄道会社）であった。初代満鉄総裁後藤新平はその2年後の1908（明治41）年6月、「年月ノ邁ムト共ニ人衆ヲ移シ得ハ、満洲ハ事実上帝国ノ領土トナリ、後年還附ノ場合ニ於テモ、我ノ利益ハ確定不動ナルノミナラス、或ハ終ニ實際還附シ得ヘカラサル事情モ生シ来ルヘシ」と述べる。子供の場所取り合戦の如き発想ではあるまいか。既成事実を残してしまえば、もうこっちのものと言う訳である。

翌年2月に発表された、小村壽太郎（日露戦争当時外務大臣）の以下の言は、「満韓移民集中論」として広く知られた。「日露戦役ノ結果、帝国ノ地位一変シ、其経営ヲ行フベキ地域ノ拡大ヲ見ルニ至リマシタルヲ以テ、我民族ガ濫リニ遠隔ノ外国領地ニ散布スルコトヲ避け、成ルベク之ヲ此ノ方面ニ集中シ、其結合一致ノ力ニ依リ経営ヲ行フコトヲ必要トスルニ至リマシタコトデゴザイマス」²。彼には、1905（明治38）年11月に、「ロシアから譲り受けた関東州の境界線（あたかも樺太の国境に立つてゐるやうな標柱が、東海岸から西海岸まで、一直線に続いてゐたものを）、あんなもの取り壊はしてしまふのだね、と軽く云つてのけられた」という記録も残っている。後者は公式発表されなかったものとはいえ、こういうところに本音が吐露されていた。満洲移民論には、建前の世界、或いは表面上の理想論とは相矛盾する思想が錯綜していた。本稿ではこの思想の諸矛盾に焦点をあて、究明していくことにする。

2. 1. 満洲移民とは

そもそも移民とは何か？日本人移民の歴史は明治元年のハワイ移民により幕が上げられる。その後、アメリカ本土へと流れが移り変わり、明治後半からは、排日運動によりアメリカから締め出された日本人は、南米ブラジルへと向かうことになる。そして次に、日本の帝国主義の高まりのなかで浮上してきたのが満洲移民であった。しかし、「移民」と称されたものの、「満洲移民」という名称については様々な議論を惹起した。日本における移民が如何に棄民的存在として捉えられてきたかについては、拙稿にて既に論じたところであるが、このことは満洲移民思想を論じる上でも重要な前提事項といえる。ここで、試験移民が開始した、1932（昭和7）年当時のブラジル移民と満洲移民に対する評価が如何なるものであったか取り上げる。

「[「ブラジル」へ日本国民ヲ捨テニ行ク、アレハブラジル国民ニナルノテヤルノテアル、斯フ云フ日本人ヲ捨テニ行クニ日本ノ金ヲ使ツテ捨テヤツテ教育シテヤツテ、サウシテ以テ逃ケテ行ク、ソレニ対シテサヘモ年々三百万円、五百万円ノ金ヲ使ツテ居ル]「ブラジル移民ヲ致ス位ナラハモット国ノ生命ノ上カラ見テ是非ヤラナケレハナラント云フ滿蒙ノ殖民ニ対シテハ何増倍ノ力ヲ盡シテ宜イ、金額ノ上カラ数千万円ノ金ヲ使ツテモ宜イ」³ (1932 [昭和7] 年1月)。「南米への移民は棄民であるが滿洲への移民は日本の国土を延伸せしむべき真の植民である。政府も国民もすべからく此大事業に対して渾身の努力を拂ふべきである」⁴ (1932 [昭和7] 年4月)

2. 2. 「移民」名称の変更論

「滿洲移民」における「移民」名称の変更議論は2つの論点に集約できる。

第1は、「移民」のイメージにあった侵略的意図を中国の人々から払拭するため、或いはそれから一時的にでも目をくらすために起こったものである。このことは、次の移民機関の組織に関する言にも現出している。

「若し平穩無事に而も多大の犠牲なくして日本人移民の成功を期待し得ば移民会社設立は當を得たる処置と謂ひ得可きも、成否未だ確定せず少くも数年は試験時代にある今日直に広大なる地域を保有する大移民会社の設立は時期尚早の感あり。殊に滿洲国人は殆ど農民なるを以て日本移民の為にのみ此の広大なる地域を占有するは人民に多大の不安と反感を生ぜしむるべし。然れ共土地の保有は徒に日を空ふる能はずとせば移民会社とせず土地開拓会社とし實質的に日本移民の移植に努力するを適當とすべし。」⁵ (1933 [昭和8] 年2月、第2部第1班)。

この背景には、関東軍を中心とした強権的土地収奪に対する排日運動が無視できぬ状態にあったという現実がある。「商租権其他ノ凡ユル經濟問題ニ対スル彼ノ排日行動ノ発現ハ日一日ト甚シク、苟クモ滿鉄附属地ヲ一歩踏ミ出デンカ、滿蒙各処ニ於ケル邦人ノ生命ト財産トハ重大ナル危険ニ曝露当面シツツアリ、我在滿ノ同胞ハ勿論母国朝野ノ識者ハ果シテ如何ナル見解ヲ以テ此皮肉ヲ釋カントスル乎。」⁶ (1921 [大正10] 年)。こうした状況下、日滿両国政府により決定された1939 (昭和14) 年12月の「滿洲開拓政策要綱」により、滿洲農業移民と移民団は、公式には開拓農民、開拓団と呼ぶことになる。特に「現地デハ総テ開拓ノ二字ヲ冠セルヤウニナツタ。開拓民、開拓事業ト云フ風ニ…」⁷ たとえその呼び名を変えようとも、それが広大な既耕地の収用という、本来の「開拓」

とはほど遠い侵略的性格を帯びたものであったことに変わりにはなかった。この語は必ずしも定着せず、その後も「移民」という名称は使われ続けた。

こういった表面上の取り繕いは、「満蒙開拓青少年義勇軍」に対しても為された。この制度は、農家の二、三男以下の未成年者を集め、訓練期間を経て移民団に移行させるものであったが、満洲国側では侵略的ひびきを弱めて「満洲開拓青年義勇隊」と呼び変えられた。

第2の論点は、先行する「ブラジル移民」の「出稼ぎ」イメージとだぶることに対して異議を唱えたものである。「ブラジル移民」を含め、これまでの「移民」は経済的条件が動機の主因であり、自由主義的に、立身出世を夢見、或いは金を懐にして故郷に錦を飾るといった個人の利益を主とするものであったと認識される。政府も移民からもたらされる外貨を歓迎する向きがあった。しかし、「満洲移民」は、こういった夢を描くことのかなわぬ厳しい大地であった。そのため、これまでの「個人主義」「自由主義」を真っ向から否定せねばならなかった。例えば、開拓地の教育問題について述べた以下の言の如く現出された。「学校の環境に就き述べれば、(中略)農業を生業とする農村にして農業を以て立つべき特異性に立脚し、立身出世主義乃至偏知教育の弊を充分除去するの必要がある」⁸(1941[康德7]⁹年3月)。こうして、かつて「渡米熱」まで呼び起こした「立身出世論」は真っ向から否定され、それに代り「東亜新秩序建設ノ偉業¹⁰(昭和14年8月)」などに代表される国家権力からの大義名分を押し付けた。そして、「満洲移民」は、かつての「出稼ぎ移民」の如きちっぽけな存在ではなく、「お国のための鋏の戦士なのだ」と鼓舞して送り出すという方法に至った。「満洲移民は単なる移民者自身の方便乃至利益の為に非らず日滿不可分一体の国策遂行と本村の永遠なる彌栄を祈念して実行せられるものなるを以て移民者に対しては歓迎其他総て出征軍人に準じ取扱うものとす」¹¹そこで求められた「移民」は「右を向けと言へば右を向いて、進めと言へば進む人であれば宜しい。それで労働を厭はずに真面目にやる人で、満洲移民の大目的と云ふものがはっきり分って居りさへすればそれでいゝ」¹²という、加藤完治の言に代表されるものであった。また、単に「農業移民」にとどまらず、その質の向上、或いは「移民」イメージの向上を図るため、私立大学卒業生を送り込む計画が立てられる。実際、立命館大学により満洲に大学が移駐され、実業教育振興会からはそのための補助金が支給された。¹³こうした背景の下で、「満洲移民」をこれまでの「移民」と同列に通念的に扱うなどは言語道断との議論が起り、移民名称の変更が叫ばれた。「日本トシテハ、民族大移動ヲ表徴スル如キ新語ヲ欲スル」¹⁴(昭和14年8月)。しかし結局、それに代わる名称は考え出されぬまま終末を迎える。

3. 満洲移民に担わされた役割

3. 1. 移住地の実態

「単ニ満洲へ行ツテ農業ヲヤレハ儲カル、或ハ楽ナ生活カ出来ルトイフヤウナコトノミヲ当ニシテ来ルノテナク、本当ニ精神的ニ彼処ニ行ツテ大和民族ノ天地ヲ新ニ開クントイフ、斯ウイフ考ヘヲ打込シテ青年ヲ此方ニ送りタイト思ヒマス。忠君愛國タケテハ農業ハ出来ナイト仰イマスカ、忠君愛國ノ精神カナレハ満洲テ勞作的農業移民ヲ行フコトハ決シテ出来ナイト思ヒマス」¹⁵（昭和7年1月）。

これは翻れば、満蒙の地が、アメリカ大陸の如き富をもたらしてはくれぬことを示す。こうした現実を踏まえて、「満洲移民」に対しては、次のような批判の声もあがる。「満洲は一部新京から南の方は別として新京から北は殆ど移民に適さず、非常な労力を費して得る所は極めて少い。「わざわざ何も穫れぬ所へ持つて参つて、其処に無理やりにやらせて、精神を鍛練させるといふことは、苦しめる以外の何物もない」[向ふへ行つたお役人の報告は成功したやうに言つて居る]が「実際は逃げて帰る者が多いのである」。

これまでの移民は立身出世を夢み、或いは故郷に錦を飾ることを胸に海を渡って行った。しかし満洲への移民は、「現在迄の過程に於て出稼一般と区別するものであると考える。国策移民の名の如くこの農業移民に於ては従来のところでは多分に精神的な要素を含んでいる。そこには開拓者の嘗めねばならぬ、荊の路が横たわってさえいるとすれば決して出稼と之を同日に論じ得ぬであろう」¹⁶（昭和16年2月）の言が語る通りである。すなわち、「満洲移民」に於ては、私欲を滅し、「お国の為に行かん」の精神主義を吹聴することなくしては、そもそも実現困難な地であった。

満洲移民事業は、日本農村側の必要よりも、満洲の関東軍の必要に基づいて展開されたものであった。1932（昭和7）年、満洲における反日本帝国主義勢力は30万人といわれた。¹⁷関東軍は、満洲の点と線である都市と鉄道沿線を確保し、その中間地帯（主として農村地帯）を農業移民で埋める構想をたてた。移民は関東軍の治安維持協力者として位置付けられ、在郷軍人や退役軍人による「屯田兵」移民が基本とされており、¹⁸「一箇村に対し軽機関銃二挺、小銃二〇〇挺を附與して自警団を組織せしむること」¹⁹とされていた。移民団の入植地は、日本の満洲支配に根底から対抗する反満抗日軍の遊撃地域を取り囲み、或

いはそこに楔を打ち込む形で選定された。また、仮想敵国ソ連との国境地帯や工業的に重要な都市の外郭などにも重点的に配置された。1932（昭和7）年当時の移民地の実態は、「満蒙ニ於テハ今後モ当分ノ中匪賊ノ横行止マザルモノト見ルベク移民ガ或ル程度ノ自警力ヲ備フルコトハ絶対ニ必要ナリ」。²⁰「固ヨリ軍部ガ予想スル如ク短期間ニ百万ヲ以テ数フル内地人ヲ滿洲ニ移住セシムルコトハ単ナル夢物語ニ過ギザル可シト雖モ滿蒙ニ新国家ガ建設セラレ帝国指導ノ下ニ運営セラレルモノトシ又政府及国民ニ於テ相当ノ対価ヲ惜シマザルニ於テハ稍大量ノ移民ヲ此ノ地方ニ送り面目ヲ一新スルコトハ不可能ニ非ザルモノト考フ」²¹というものであったのである。

こういった移民地の現実があったが故に、大義名分が様々に宣布され、移民への動機付けが人為的に為されて行ったといえる。そこには、酷寒の大地の現実や、或いは匪賊が横行する現実を、鍛練させた「精神」で立ち向かわせよとの意図が隠されていた。その結果、「所謂信念ヲ植付ケテ送ルトイフ為メニハ訓練ヲスル必要カアル」ということになり、特別の訓練所が設けられる。満洲移民の主要な立役者となった加藤完治は、この訓練所と大きく関わっていく。彼は、日本敗戦の日まで茨城県内原の「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」²²に所長として君臨したが、そこでの訓練の基本は、日本は神の国であり天皇を尊崇して農業に励むことが国家にも天皇にも忠であるという、皇国観に基づく農本主義²³を実践させることにあった。1915（大正4）年には、山形県自治講習所の初代所長として迎えられるが、ここでも、開拓の根本は人力による「天地返し」にあるとし、1本の鋤に全精神をこめて大地を掘り起こすという精神陶冶に重きをおいた原始的ともいえる農法を実践し、農業技術や機械利用は二の次であった。彼のやり方は、精神主義の極端な実践であったとみえるが、いずれの訓練所においても、精神鍛練に主眼が置かれていた。「一般開拓民ノ訓練ハ其ノ心身ヲ鍛練陶冶シ、特ニ八紘一字ノ理想、滿洲建国ノ精神ヲ振作涵養シ、滿洲開拓政策ノ本義ヲ体得セシメ、併セテ開拓地ノ建設及経営ニ必要ナ技術ヲ授クルヲ主眼トス」²⁴（昭和15年3月）

「精神」或いは「日本精神」は「満洲移民」においては常套句の如く用いられた。土地収奪に対する排日行動が激烈を極めていたことについては既に言及したが、1935〔康徳2〕年に発生した匪賊襲撃事件が移民に与えた影響について述べた以下の論にも、この精神論が引き合いに出された。

「7月10日の本部火災、8月15日此の水田班襲撃と相前後して災害に見舞われ、之れが建設途上の組合員に与えた精神的打撃は洵に甚大なるものがあった。即ち風土病（カシンベック氏病）或は治安を理由として退団者続

出する状況であったが、真に此の地に建設の人柱たるの気合無かりし為だろうか？建設の将来に希望を持たなかったのであろうか？さもあろう華かなる資本主義社会に於ける所謂貨幣経済を忘れ得ず魅力を感じ、真に大地に親しみ開拓の快味を味い得ざりし為か？一般に精神力の薄弱な半途求学者に退団者多かりしは事実の物語る所であって、精神訓練の足らない故か？文部省の拓殖訓練所出身者動揺し退団を申出たのは如上の経緯を物語る好個の証拠であらう。」²⁵ (1941 [康徳7] 年3月)

3. 2. 満洲移民は如何なる存在として認識されていたか

まずは、「満洲移民」を募る際の常套的宣伝文句を取り上げる。

「農村ハ実ニ国家ノ根幹デアル、我国ハ肇国ニ際シ伊弉諾伊弉冊ノ二神ハ先ヅ国土第八洲ヲ始メ海ヲ生ミ山川草木ヲ生ミ其ノ土ノ上ニ天照大神ヲ始メモロモロノ神々ヲ生ミ給フタ即チ幾千年来此ノ身土不ニ信仰ヲ持シ土ヲ熱愛シ草木鳥獸虫魚総テコレヲ同胞トナシ愛育シ来ツタノハ我ガ日本農民ノ姿デアル」「日清、日露ノ戦役以来吾等ノ祖先ハ其ノ敬愛スル十万ノ生靈ハ満洲ノ曠野ニ骨ヲ埋メ尊キ血潮ヲ以テ東洋永遠ノ平和ヲ購ヘ得タノデアル、今又我等ノ同胞ハ同ジ血潮ヲ流シ骨ヲ碎イテ東亜永遠ノ平和ヲ戦ヒ取り東亜諸民族ヲシテ各其ノ処ヲ得セシメ以テ皇道樂土ノ建設ヲ目指シ東亜ノ天地ニ日滿支相提携東亜協同体ノ新秩序ヲ齎スベク聖戦ヲ続ケツ、アル吾等直チニ起チ歟ノ戦士トナリ、土ヲ耕シ土ノ中カラ皇道ヲ宣布シ東亜諸民族ヲ指導シ以テ長期建設ニ参ゼネバナラヌ」「我が国ノ人口増加ハ大和民族生成発展ノ姿デアリ大陸移動ハ「八紘ヲ宇トナス」神意ニシテ我が大和民族擔フベキ光荣アル大使命デアル、満洲農業移民ハ此ノ大使命ヲ果シ農村更生ニ光明ヲ齎ラシ我が家ヲ繁栄セシムモノニ外ナラヌ」「時代ヲ認識シ更生ノ意氣ニ燃ユル吾ガ親愛ナル村民各位其ノ手ニ鋤ヲ執ツテ起テ、而シテ大陸ニ移動セヨ、コレコソ神意ニ副ヒ奉リ今次聖戦ノ目的達成ニ貢献シ大陸ヲ購ヘル幾十万ノ英靈ヲ慰ムルノ道ニシテ又明朗栗熊村建設ニ寄与スル所以デアル 拓け満蒙 きつけ分村」²⁶ (昭和14年1月、栗熊村長 熊谷貞一)

それでは、満洲移民は如何なる存在として認識されていたのか。

「邦人を満蒙に移植することの必要なる所以は啻に母国に於ける過剰人口

を緩和せんとする為のみならず、満蒙に於ける帝国の權益伸張上、満蒙開發上将来帝国国防第一線の確保上絶対に喫緊焦眉の急務に屬するが故なり

凡そ一地に於ける權益の伸張は単に資本の投下、事業施設の拡張のみを以てしては永久的に之を期待し得ざる所にして相当多数の根強き母国人命を扶植して初めて資本と如実に活動せしめ得べきものなり、満蒙今日の情勢を誘致したる最大の原因は邦人特に農業移民の欠如せしに因るものと断ずることを得べし」[即ち満蒙は軍事上最も樞要なる地にして将に国防の第一線たるべきは何人も之を疑ふなからん、然らば之を為す如何、満蒙の要所各地に出来得る限り多数の邦人を移植定着せしめ文化的開發に資し一朝有事の際は鋤を棄て、敢然干戈を採つて起つべき同胞に俟つの外なしとす]²⁷ (1932 [昭和7]年2月、関東軍統治部)

「移民ニ対シテハ辺境地帯ノ防備ニツキ重大ナル価値ヲ期待シテキル。間接的価値トシテハ、戦時ニ於テ国境地帯ニ日本人ノ家ト人トガ有ルコトガ絶対ニ必要デアリ、平時ニ於テ日本移民村ハ辺境防備ノ日系軍*ノ重大ナ慰藉トナル。又直接的価値トシテハ、国境地帯及同地帯軍事施設ノ防衛、交通路ノ確保、軍事食糧確保等ニ重大ナル意義ヲ有ツ」²⁸ (1939 [昭和14]年8月)

移民を「一朝有事」の際の戦闘要員として国防第一線に駐屯させる。ここでは、帝国主義推進のための即戦力或いは国防分子としての位置付けが明言されている。しかし、対外的には、これは強調されず、「東洋平和のため」或いは「高級文化を有するものの天賦の使命」等に摩り替えて論じられる。すなわち、移民或いは植民事業とは、「単ニ經濟的關係ノミナラス高級文化ヲ有スル所ノ国民カ尚文化ノ低イ所ノ地方ニ其ノ文化ヲ扶植致シマシテ、其地方ノ文化ノ向上ヲ図ルトイフコトヲ其地方ノ国民ソレ自体ニモ非常ナ幸ヒヲ与ヘルモノデアリマス。(中略) 其処ニ存在スルコロノ多クノ富源其ノモノハ其処ニ居ル文化ノ低イ所ノ住民ノミテハ到底之ヲ開發スルコトハ出来ナイ、併シ其処ニ高級文化ヲ有スル所ノ母国ノ国民カ資本ナリ知識ナリヲ移住シマシテ其処ノ土地ヲ拓クコトニ就テ、其処ノ富源カ開發サレ、従テ其処ノ文化モ向上シテ其処ノ住民カ利益ヲ得ルトイフコトハ明カナ事実デアリマス」。「斯フ云フ様ナ点カラ考ヘテ見マスト、母国カーノ植民地ニ向ツテ植民地ニ活動ヲ為ストイフコトハ単ニ其国ノ延長トカ其国ノ拡張ト云フコトノミナラス当ニ文明国民ニ与ヘラレタ所ノ其天賦ノ使命ヲ果ス所以デアリマス」²⁹ (昭和7年1月)

「満蒙の地は文化未だ普ねからず、千古斧鉞を入れざる大森林あり古来鋤

犁を知らざる大平蕪あり、之等の処女地を開拓し農牧林礦の産物を豊かならしむることは我国の食料問題、工業原料問題の解決の鎖鑰を開く所以のものにして邦人が文化低き満洲に移りて植民的活動を起さんとするは正に吾人の雙肩に懸る天賦の使命に外ならず、更に帝国は国防上の必要に迫られ朝鮮を併合せりと謂も東洋永遠の平和を確保する為には満蒙の地を完全に我手中に把持し、南渤海を制し西興安嶺を扼し以て満蒙を確保せざれば安んじて之に居る能はず、」³⁰（昭和7年2月、関東軍統治部）

見事な論の転換と言わねばならない。「韓国併合」も決して自国のために行つたものではなく、あくまでも「東洋平和を確保」するためのやむなき措置であつたというのである。

3. 3. 満洲移民への思想経路

「満洲移民」への思想経路をたどると「大アジア主義」に行き当たる。この思想は、1885（明治18）年に著された樽井藤吉「大東合邦論」³¹に溯る。この中で樽井は、日本の近代国家としての今後のありうべき道として「脱亜入欧」ではなく、アジアの隣国、韓国や中国と連合して西欧列強に対抗しうる勢力を形成し、日本がアジアの盟主となって国力を増強すべきだ、³²と主張する。

この大アジア主義は、近衛文麿の「東亜新秩序」やその後の「大東亜共栄圏」思想へと引き継がれ、また先述の加藤完治の「鴨緑江突破の満蒙植民論」や、満洲国の建国イデオロギーにも影響を及ぼしている。すなわち、満洲建国の理想は、満蒙の地にアジア諸民族が協力し、かつ日本が盟主となって「五族（＝日本・朝鮮・満洲・漢・蒙古）協和」というアジア的王道を打ち立て、同時に植民地主義という欧米的な覇道に対抗することを目指していた。また、満洲に傀儡国家を建設した中心人物と目される石原完爾でさえも、満洲建国の意義を、日本・朝鮮を防衛するための国防圏の構成や、狭隘な日本の経済圏を拡大し日満一体の経済圏の建設のためだけでなく、西欧的帝国主義からのアジア圏の開放と東亜の連合を理念的には唱えていた。³³つまり、大アジア主義は満洲移民事業の成立と同時にその展開を根底において支えた間接的要因であつたといえる。

「日本人ハ特ニ満洲国ニ於ケル民族協和並ニ産業開発ノ中核的分子トシテ其物心両面ニ亘ル堅実且恒久的ナル生活態様ヲ確立スルト共ニ其生活ノ實際ヲ通シテ深く原住民ト融合シ堅ク之ト結合シテ一徳一心民族協和ノ理想

ニ基ク全体的社会規範ヲ実践具現シ以テ不変不動ノ国家組織ヲ結成鞏化シ東亜協同体磁石タラシムルヲ以テ根本方針ト信スル」³⁴（昭和14年1月7日）

「満洲農業移民の第一意義は、之を通じて満洲国に於ける五族協和の実を挙げ、英国が印度に於てなした資本による搾取機構たる英国型植民政策に對立して、民族協和に基礎をおく日本型植民政策を樹立することに高い理念を有する。この理念と経済面とを如何に調和せしむるかが現在及将来の満洲農業移民に於ける課題でなければならぬ。」³⁵

民族協和・王道楽土実現のために、大和民族の多数が満洲に移住し、諸民族の中核となって活躍すること。その際に土に殉ずる日満の農民が満洲の土を「拓き」、農民と農民との固い握手によってこの大使を果たすこと。つまり、「懐手をして満人に小作等をさせて楽に食って行」³⁶くのではなく、自家労力を中心とした自作農主義で、自給自足を行う農家であることが期待されていた。これは移民と土地を密接に結び付けておくことにより、有事の際には移民をして強固な守りの役を担わせることをねらっていた。この意味からも、かつてのアメリカ移民の如き‘出稼ぎ’とは一線を画するものとして捉えられた。

4. 結語

本稿では、満洲移民の流れを追った概説、及び、本表題の下、考察した後半部分をカットした。後篇として、次の機会に公表できれば幸いである。

注

- 1) 監修：陸軍歩兵少佐松井眞二。米国国立公文書館所蔵。テレビ朝日「映像タイムトラベル」（1998年5月8日）にて放映。
- 2) 『満洲移民関係資料集成5』、184-198頁、第I編-⑩「開拓時報 第1号」（拓務省拓北局、1942年3月）所収、「満洲開拓前史一日露戦争から満洲事変まで一」より抜粋。
- 3) 『満洲移民関係資料集成1』99-100頁、第I編-①資料。
- 4) 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編『エコノミスト』（1932年4月1日号）掲載の佐藤安之助の論より。

- 5) 『満洲移民関係資料集成13』181-182頁、第IV編-①「満洲農業移民立案調査書類第1巻第1号」(満鉄経済調査会、1936年9月)所収、経済調査会関係「日本人移民対策案要綱」より。
- 6) 『十五年戦争極秘資料集22:満洲移民拓務局原資料』376頁、「商租権問題解決ニ関スル陳述書」[秘](満蒙土地問題研究会、1921)。
- 7) 『満洲移民関係資料集成3』72頁、第I編-⑥「満洲開拓政策基本要綱案」。
- 8) 『満洲移民関係資料集成9』393頁、第II編-⑬「第三次開拓団瑞穂村建設五ヶ年史」[秘](浜江省公署、1941年3月)。
- 9) 帝政を施行し「満洲帝国」となった昭和9年3月、元号を「康徳」と改称した。康徳元年=1934(昭和9)年。
- 10) 『満洲移民関係資料集成3』83頁、第I編-⑥「満洲開拓政策基本要綱案」。
- 11) 『満洲移民関係資料集成7』437頁、第II編-⑦「分村計画事例——西筑摩郡読書村」(長野県経済部 経済更正参考資料第37号、1939年1月)。
- 12) 山田昭次編『満洲移民』416頁、資料編「満洲移民を語る」(1936年3月)。
- 13) 『満洲移民関係資料集成3』83頁、第I編-⑥「満洲開拓政策基本要綱案」。
- 14) 『満洲移民関係資料集成3』72頁、第I編-⑥「満洲開拓政策基本要綱案」。
- 15) 『満洲移民関係資料集成1』80-81頁、第I編-①資料。
- 16) 『満洲移民関係資料集成7』234頁、第II編-④「満洲農業移民母村経済実態調査——山形県東田川郡大和村」(積雪地方農村経済調査書(同調査所報告第41号、1941年2月))。
- 17) 喜多一雄『満洲開拓論』42頁。
- 18) 喜多『満洲開拓論』52-66頁。
- 19) 『満洲移民関係資料集成13』11-15頁、第IV編-①「満洲農業移民立案調査書類第1巻第1号」(満鉄経済調査会、昭和1936年9月)、軍関係「日本人移民案要綱」。
- 20) 『満洲移民拓務局原資料』64頁。「満洲ニ於ケル邦人移植民農業ノ規模」(1932年1月18日)、南満洲鉄道沿線の実態。
- 21) 『満洲移民拓務局原資料』47頁、「満洲ニ於ケル邦人移植民農業ノ規模」より。
- 22) 役場の若手官吏がこの内原訓練所へ派遣され、中堅の官吏として教育・養成された。その後、彼らはそれぞれの村において、戦時食糧増産推進隊となり、警察とともに食糧の増産と徴発とに大きな威力を発揮した。
- 23) 農本主義思想とは、すなわち橘孝三郎の「550万戸3千万大衆……日本を双肩に担って日本の生命を現実に維持しつつある存在」(『日本愛国革新本義』)という捉え方による。農本主義は、農村や農民については全体のま

- ま、すなわち「村のものは村のもの」としてきわめて階級調和的に捉え、その農本社会を破壊するのが都市であるとする。政府当局は農本主義により農村を全体として捉え、貧農救済に重点を置きかつ隣保共助を強調することにより階級対立を農村に持ち込まず農村秩序を維持しようとした。
- 24) 『満洲移民関係資料集成3』420頁、第I編-⑦「臨時満洲開拓民審議会会議録」[秘] 同審議会(1940年3月)。
 - 25) 『満洲移民関係資料集成9』142頁、第II編-⑬「第三次開拓団瑞穂村建設五ヶ年史」[秘](浜江省公署、1941年3月)。
 - 26) 『満洲移民関係資料集成7』342-344頁、第II編-⑥「満洲農業移民分村計画書」(香川県綾歌郡栗熊村、1939年1月)。
 - 27) 『満洲移民関係資料集成13』24-25頁、第IV編-①「満洲農業移民立案調査書類第1巻第1号」(満鉄経済調査会、1936年9月)、軍関係「日本人移民案要綱説明書」より。
 - 28) 『満洲移民関係資料集成3』25頁、第I編-⑥「満洲開拓政策基本要綱案」より三品少佐の言。
 - 29) 『満洲移民関係資料集成1』23-24頁、第I編-①。
 - 30) 『満洲移民関係資料集成13』24-25頁、第IV編-①「満洲農業移民立案調査書類：第1巻第1号」(満鉄経済調査会、1936年9月)、軍関係「日本人移民案要綱説明書」より。
 - 31) これは、同時代の福沢諭吉の「脱亜論」と相対立するものであった。しかし、両者とも日本の目的に関しては、近代化=強国化という点で一致していた。ただそこに至る過程で、西欧化を志向するか、日本の伝統、アジアの自主尊重を志向するかの違いであった。
 - 32) 橋本満「『普遍性』を超克するもの——民族」 中久郎編『戦時下日本社会における民族問題の研究』(民族問題研究会、1986)。
 - 33) 橋川文三「東亜新秩序の神話」 橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史II』(有斐閣、1970)。
 - 34) 『満洲移民関係資料集成2』301頁、第I編-⑤「移民根本国策基本要綱関係資料」[極秘] 関東軍司令部「移民根本国策決定ニ関スル懇談会席上軍参謀長ノ挨拶」より。
 - 35) 『満洲移民関係資料集成7』219頁、第II編-④「満洲農業移民母村経済実態調査」(1941年2月)。
 - 36) 朝日新聞社編『新農村の建設』(朝日新聞社、1939)、15頁。

参考文献

- 『満州移民関係資料集成』（第1期1～40巻、第2期1～23巻） 不二出版、1990—1992、1998—1999.
- 朝日新聞社編。『新農村の建設』 朝日新聞社、1939.
- 大谷正「融和運動と満洲移民」『専修史学』第16号（1984年12月）.
- 外務省移民局編・刊。『海外移住統計』1964.
- 加藤完治全集刊行委員会編。『加藤完治全集1～5』 加藤完治全集刊行会事務局、1967—1972.
- 喜多一雄。『満洲開拓論』 明文堂、1944.
- 桑島節郎。『満洲武装移民』 教育社、1979.
- 白取道博編。『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料』全7巻、不二出版、1993.
- 杉野忠夫「部落更正の基礎問題」『融和事業研究』45号（中央融和事業協会、1937）.
- 田川真理子「「移民」思想の潮流〈前篇〉——江戸時代～明治期後半にかけて——」『ことばの科学』第10号（1997年12月）：97—119.
- 「「移民」思想の潮流〈後篇〉」『ことばの科学』第11号（1998年12月）：51—77.
- 東宮大佐記念事業委員会編。『東宮鉄男』（初版：1940、復刻版：大空社、1997）.
- 永雄策郎。『日本植民政策の動向』（有斐閣、1944）.
- 長野県編。『長野県史 通史編9 近代3』 長野県史刊行会、1989.
- .『長野県政史2』 長野県、1972.
- 長野県経済部。『分村計画事例』（1939）.
- 長野県歴史教育者協議会編。『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』 大月書店、2000.
- 橋川文三「東亜新秩序の神話」 橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史Ⅱ』（有斐閣、1970）.
- 橋本伝左衛門。「満洲農業移民の沿革」、橋本伝左衛門・加藤完治・永雄策郎『満洲農業移民十講』（地人書館、1938）.
- 橋本満「『普遍性』を超越するもの——民族」 中久郎編『戦時下日本社会における民族問題の研究』（民族問題研究会、1986）.
- 満洲移民史研究会編。『日本帝国主義下の満洲移民』 龍溪書舎、1976.
- 満洲開拓史刊行会。『満洲開拓史』 開拓自興会、1966.
- 『十五年戦争極秘資料集22：満洲移民拓務局原資料』 満蒙土地問題研究会、1921.

南満洲鉄道株式会社経済調査会編・刊、『満洲農業移民方策』立案調査書類2編
1巻1号、1935.

山田昭次編、『近代民衆の記録6：満洲移民』新人物往来社、1978.

山田盛太郎、『日本資本主義分析——日本資本主義における再生産過程把握
——』（岩波書店1934）.

